

望郷の念に 疲れる

小 野 州 一



ドーヴィル風景

1970年、賑やかだった万国博が閉幕した9月の終わり、(日記の付ける習慣がないので、何日だったか思い出せないのだが——)、大阪伊丹空港から、フランス館がチャーターし、空席のできたエールフランスで、香港經由—巴里に発った。

発った日、日本は真夏を想わせる暑さだったことを覚えているが、巴里はもう晩秋の気配がして、綿コートの夏服から一足飛びに着いた朝、街はずれのアパートの5階の部屋で、冬服に着換えた。

発つ10日ほど前、巴里に住んでいるKに、アパートの予約を頼んでいた部屋は賑やかな大通りに面していて、終日走り続ける車の音に悩まされはしたが、ベッドと洋服ダンスのある5坪ほどの居間に小さな食堂が続いて、4カ月の仕事部屋には快適だった。

洋服ダンスの扉を開けると、シッカチーフの小さな壘が出てきたから絵を描く人間が住んでいたと思わせた。

着いてから4、5日は毎日、生活のための買物が続く。以前に滞在した折に使っていた食器類を友人の部屋に取りに行ったり、イーゼルを作るための木材や、画材などを買い歩く。

観光会社が募集する「ヨーロッパ秋の旅」とは大違いで、着いた日から買物袋を持って、ブドー酒やパンや、ソーセージを買い込んでの独り住いは、とても忙しいもののように思えたり、長閑な風景であったりするが、夕方、仕事を終えてから何人かの友人たちと、ブドー酒を飲みながらの夕食の仕度は楽しい。

そして、食後いつも決ったように、低額の賭金で一喜一憂するブリッジに似たゲームは、外国暮らしの疲労を忘れさせる。

近くはなつたといっても、ヨーロッパはやはり遠い

国。異民族の中で生活するという自体の不自由さに加えて、何ともいぬ望郷のような感傷に襲われ続けながらの生活は、とても疲れることのような気がする。

3年ほど前からきていた高名な日本人画家にE氏の死亡の知らせを聞いたときも、KやTと食卓で向い合いながらカードをしていたし、サロン・ドートンヌの初日のオープニングの夜もカードをして、出かけなかった。

巴里は美しい街なれど、所詮日本人にとってはよその国。いくら永く住んでいてもエトランゼという立場から逃がれることはできない。

巴里に住みついているKやTと向い合っているとき、暗い蔭のようなものを見ってしまうことがある。そんなとき、南フランスの海岸で暫く住む計画を考えたりしていたのに、考え直し始めたことを覚えている。

しかし、東京の街や日本全体に今、急激な発展が訪れているそうだが、非人間的な粗雑さや喧燥は、一つの仕事を続けたいと思っている者に考える時間を与えてくれない。

そんな絶望から巴里で生活していると、この街が、ある優しさのようなものを持ち続けていて、考える、という生活がまだ可能な街であることを、とても羨ましく思う。

クリスマスイヴの夜、ノートルダム寺院での夜半からのミサは、随分たくさんの市民が集まっていたのに、とても静かだった。

年が変わって71年、ヨーロッパ一帯に寒波がきた日、筒に巻いた絵を持って巴里を発った。考えてみると、また巴里からどこへも旅行に出かけなかったことを、少し後悔していたように思う。